

固定遊具の有無による公園遊びの違いについて

著者：塩野谷祐子¹⁾・中村奏太²⁾

所属：1) こども教育宝仙大学・2) 三鷹市立上連雀保育園

英文タイトル：About Difference in Park Play by Having Fixed Playground Equipment or Not

英文著者名：Yuko SHIONOYA・Kanata NAKAMURA

英文所属：Kodomo Kyoiku Hosen University・Kamirenjyaku Daycare

要旨

本研究の目的は、固定遊具の有無による公園遊びの違いを検討することである。調査対象者は幼児4名と小学2年生4名であり、都内にある固定遊具のないA公園と固定遊具のあるB公園で、同日の午前中30分ずつ遊びの様子を観察した。その結果、A公園では鬼ごっこなどの走る遊びが主に見られ、年下の子どもがついていけなくなった際に遊びのルールを改善する工夫や、遊び開始前にどの遊びを行うかの話し合いがなされるなどコミュニケーションの時間が多くあった。一方、B公園では遊具を利用し、多くの種類の遊びが展開され、年上の子どもが年下の子どもを手助けする場面や、順番を守る、役割分担を行うといった行動が見られた。また、基本的な動きの種類に関しては、A公園よりB公園のほうが多く、A公園においては「体を移動する動き」、B公園においては「用具を操作する動き」が特に多かった。これらのことから、固定遊具の有無によって遊びからもたらされる利点の異なることが明らかとなった。

キーワード：公園 固定遊具 遊び 基本的な動き 幼児 小学生
コミュニケーション 非認知能力

1. はじめに

公園は、子どもたちの遊びの空間として存在価値がある。公園の形態は様々であり、固定遊具のない公園もあれば、固定遊具のある公園もある。子どもと遊具の関係性について、「都市公園における遊具の安全確保に関する指針（改訂第3版）」（国土交通省，2025）では、「遊具は、多様な遊びの機会を提供し、子どもの遊びを促進させる。このように遊具は、子どもにとって魅力的であるばかりかその成長に役立つものでもある。また、子どもは、さまざまな遊び方を思いつくものであり、遊具を本来の目的とは異なる遊びに用いることもある。」と述べている。本来の目的とは異なる仕様としては、例えば、ジャングルジムを鬼から逃げる障害物として使用したり、ブランコを椅子として使用したりする、などがある。森川（2011）は、この本来の目的とは異なる仕様も含め、固定遊具の役割を、①公園遊びの拠点となる（おまごとのおうち、鬼ごっこの牢屋などの見立て）、②公園遊びのきっかけになる、③遊びに変化や発展をもたらす、④解放感が味わえる、⑤挑戦しようという気持ちを持つ、とまとめている。これらの内容は固定遊具があることで成り立つことなのかと考えてみると、そうではない場合もある。例えば、おまごとのおうちや鬼ごっこの牢屋は、植え込みのある公園ならその後ろの空間をうまく使って見立てることができるかもしれない。また、少し段差のあるブロックが続いていれば、高くなったブロックのところを歩いたり走ったりして、落ちないようにして遊ぶ、というように遊具ではないものが遊びのきっかけになるかもしれない。さらに、解放感に関しても、遊具が無くても広い空間を走り回れば感じることもできるかもしれない。ただ、遊びに変化や発展をもたらしたり、挑戦することに関しては、固定遊具があったほうがより可能性が高まるものと考えられる。

もし、遊具が無い公園に利点が無いのであれば、固定遊具を設置した公園だけを増やせばよいが、実際には遊具の無い公園も存在している。そこで、本研究では、固定遊具のない公園と固定遊具のある公園において、遊びから得られる利点にどのような差異があるかを比較し、公園のあり方について検討することを目的とした。

2. 研究方法

1) 調査対象者

都内 C 区在住で、小学生や幼児を持つ保護者に研究の趣旨を文面と口頭で説明し、同意を得た上で小学校 2 年生 4 名（男児 3 名 女児 1 名）、幼児 4 名（年長児の男児 1 名と女児 1 名、年中児の女児 1 名、年少児の男児 1 名）の計 8 名を調査対象者とした。

2) 調査方法

都内 C 区にある固定遊具のない A 公園（写真 1）と固定遊具のある B 公園での遊びの違いを観察し、同時に動画撮影も実施して分析時に活用した。A 公園と B 公園は近くにあり、どちらの公園も同日（2024 年 9 月 28 日（土））の午前中 30 分ずつ、調査対象者が自由に遊んでいるところを観察した。A 公園は土の地面で平坦であり、B 公園は A 公園の敷地面積の半分ほどの土の地面で、遊具としてターザンロープ、砂場、健康器具、スプリング遊具（写真 2-1・2-2・2-3）があった。なお、調査日の天候は曇りで、気温はおおよそ 25℃であった。

写真1 固定遊具のない A 公園



写真2-1 ターザンロープ(B 公園)



写真2-2 健康器具の一部(B公園)



写真2-3 スプリング遊具(B公園)



3) 分析内容

それぞれの公園での遊びの種類、一つの遊びがどのように展開されていくのか、遊んでいる仲間同士の様子やコミュニケーションの様子、基本的な動きの種類などを観察したデータから分析した。

4) 倫理面の配慮

倫理面の配慮として、「個人情報保護に関する法律」等の法令や倫理規定を順守し、最大限の注意を払い調査を実施した。データの使用は研究目的に限られ、研究終了後は責任をもって破棄すること、個人情報保護の厳守、観察途中における協力の中断や辞退の自由が確保されていることを書面と口頭で丁寧に説明し、同意があった場合のみ調査協力を得た。

3. 結果と考察

1) 遊びの種類(表1)

A公園では、鬼ごっこ、スキップ鬼ごっこ(幼児が鬼の場合、逃げる子どものほうはスキップ)、追いかっこ、地面に絵を描く、葉っぱ拾い、物を拾う、ブロック(縁石)歩き、砂遊び、踊る、といった遊びが行われていた。またB公園では、ターザンロープで遊ぶ、ターザンロープのロープでブランコ、投げたロープを追いかける、地面に絵を描く、どんぐり拾い、物を拾う、石を使った遊び、柵で鉄棒、スプリング遊具で遊ぶ、健康器具のところを移動、などが行われていた。固定遊具がないA公園の遊びの種類は9個、固定遊具があるB公園の遊びの種類は11個で、B公園のほうが多い結果となった。A公園では主に、鬼ごっこや追いかっこのような走る遊びが展開されていたのに対して、B公園ではターザンロープやスプリング遊具のような固定遊具を用いた遊びが主に展開されていた。また、A公園で観察された少し高くなったブロックの上を歩く、B公園で観察されたターザンロープのロープでブランコや柵で鉄棒をするといった、本来遊具ではないものを使用したり、遊具を本来の使い方ではない方法で使用する姿も観察され、子どもの創造性の豊かさが確認された。さらに、両公園とも地面が砂状であったため、身体を動かす遊びではない地面に絵を描くという遊びや、何かを拾うという遊びをする姿も見られ、公園での遊びは身体を使ったものだけに留まらないということも確認された。

表1 公園別遊びの種類

公園の種類	A公園(固定遊具なし)	B公園(固定遊具あり)
遊びの種類	<ul style="list-style-type: none"> ・鬼ごっこ ・スキップ鬼ごっこ ・追いかっこ ・地面に絵を描く ・葉っぱ拾い ・物を拾う ・ブロック(縁石)歩き ・砂遊び ・踊る 	<ul style="list-style-type: none"> ・ターザンロープで遊ぶ ・ターザンロープのロープでブランコ ・投げたロープを追いかける ・地面に絵を描く ・どんぐり拾い ・物を拾う ・石を使った遊び(土を掘る・投げる・蹴る) ・砂遊び ・柵で鉄棒 ・スプリング遊具で遊ぶ ・健康器具(吊り橋・階段)のところを移動
遊びの数	9	11

2) 幼児と小学生の遊びの比較

幼児と小学生で遊び方や固定遊具の使い方に違いがあるかを検討するため、幼児と小学生に分けて分析した(表2)。遊具のないA公園における遊びの種類を比較すると、幼児が7種類、小学生が4種類で幼児のほうが種類が多かった。一方、用具のあるB公園では幼児も小学生も7種類で遊びの数としては違いがなかった。このことから遊具が無い公園では、幼児は小学生に比べ、1つの遊びを長くすることができず、様々な遊びを短時間ずつ実施する傾向にあることが明らかとなった。

幼児のA公園での遊びは、小学生が提案した鬼ごっこに参加する、追いかっこをする、地面に絵を描く、落ち葉や昆虫を探して拾う、ブロック(縁石)から落ちないように歩く、一人で踊るといった7種類であった。また、B公園では、児童が抱きかかえてロープに乗せ、補助ありでターザンロープで遊ぶ、一人でターザンロープで遊ぶ(5歳男児)、公園内の柵を鉄棒のように使う(ぶら下がりやぶたの丸焼き、こうもりを行う)、どんぐりを拾う、石を使って地面に絵を描く、砂遊びをする、スプリング遊具に座って揺らしたり、立ち乗りで揺らしたりする、健康器具の吊り橋と階段を移動して遊ぶといった遊びが行われ、こちらも7種類であった。

一方、小学生は、A公園では友達と相談して鬼ごっこをする、スキップ鬼ごっこをする(幼児との走力の差を考え小学生のみスキップ)、追いかっこをする、落ちているものを拾う、といった遊びが行われ、幼児より少ない4種類であった。また、B公園ではターザンロープで遊ぶ、ターザンロープのロープをブランコにして遊ぶ、ターザンロープのロープを投げてそれを追いかける、輪ゴムなど落ちている物を拾う、公園内の石を使って土を掘ったり、石を投げたり蹴ったりする、スプリング遊具で遊ぶ、健康器具の吊り橋と階段を移動して遊ぶ、といった遊びが行われ、石遊びを分けずに1つと考えると幼児と同じ7種類の遊び数であった。

幼児に関しては、固定遊具がないA公園において、小学生が提案した鬼ごっこに参加はするものの、自ら遊びを提案するなどの自発性のある行動が見られなかった。また、鬼ごっこについていけなくなると、途中で鬼ごっこをやめ、ほかに遊ぶこともせずに小学生が鬼ごっこをしている様子を眺めている時間や、地面に絵を描いたり踊ったりといった一人遊びを多くしている姿が見られた。今回の調査では幼児が4名いたが、幼児だけで一緒に遊びを

するなどの姿は見られなかった。よって、固定遊具という共通のものがなければ、幼児の場合、一人一人別々で遊んだり、小学生についていって遊んだりするような行動になりやすいと考えられた。また、固定遊具のある B 公園においては、一度ターザンロープに挑戦してみたものの、ロープにしがみつくのが難しいとわかり、小学生がターザンロープで遊んでいる中、幼児二人でスプリング遊具に移動して遊び始める姿が見られた。また、公園内の柵を鉄棒に見立て、鉄棒のいろいろな技を行っていた。その後は、幼児複数人で山をつくるなどの砂遊びを夢中になってやっており、A 公園では見られない光景があった。このことから、砂場のような幼児の発達過程に適した遊びの場があれば、異年齢ではあるが幼児がまとまって遊ぶことも可能であることが示唆された。また、B 公園では、遊びについていけなくなった場合でも、ほかの固定遊具で遊び始めており、発達に合った固定遊具が公園にあると、遊びのきっかけになることが明らかとなった。よって、遊びの選択の幅を広げたり、集団で遊ぶなどの遊びの発展をもたらすためには、幼児の発達過程に合った遊具や砂場が備えつけられていることが重要であると考えられる。

一方、A 公園での小学生は、最初に子どもたち同士でコミュニケーションをとり、幼児も一緒に皆で鬼ごっこをしよう決めていた。ただ、障害物がない広々とした空間だったため、一直線で追いかけて鬼ごっことなり、普通のルールで実施しても足の遅い幼児が年上の子どもたちのスピードについていけない様子が当初見られた。足の遅い子どもが鬼になった場合、誰も捕まえることができず、遊びが続かなくなってしまった。そこで、話し合いがなされ、幼児が鬼になった場合、逃げる子どもはスキップにしようという工夫が遊びに加えられた。このように、子どもだけであっても、小学 2 年生にもなれば、幼児も一緒に楽しめるようにするにはどうしたらよいか、話し合いで改善案を出すことができるということが示された。また、固定遊具のある B 公園の小学生は、ターザンロープに乗る子どもとスピードを出すために補助をする子どもというように、役割分担をして遊んだり、ロープをブランコにして遊ぶなど、ただ固定遊具の決められた遊びだけをするのではなく、子どもたちの好みや流行に合わせて固定遊具の使い方をアレンジする姿が見られた。

このように、幼児も小学生も遊びの中で様々な工夫をしていることが明らかとなった。遊具ではないもの(柵)を使った遊びの工夫、異年齢の子どもが遊べるような鬼ごっこのルールの工夫、ターザンロープの遊び方のアレンジ、それらすべての経験は子どもにとっての学びであり、非認知能力の育成につながるものと考えられる。非認知能力とは、日常生活や社会活動に重要な影響を及ぼす能力といわれている。その具体的要素は研究者によって若干異なるが、例えば、一般財団法人日本生涯学習総合研究所では 17 要素に分類し、小塩(2021)は 15 の心理的特性によって説明している。遊具ではないものを使った遊びの工夫は、前者における「主体性」「創造性」「探求性」「独自性」、後者における「好奇心」、鬼ごっこのルールの工夫は前者における「コミュニケーション力」「主体性」「実行力」「創造性」「探求性」「共感性」、後者における「グリット(困難な目標への情熱と粘り強さ)」、「自己制御・自己コントロール」「誠実性」「共感性」、ターザンロープの遊び方のアレンジは前者における「コミュニケーション力」「主体性」「創造性」「探求性」「独自性」、後者における「好奇心」が育まれるものと考えられる。

また、アメリカの心理学者のパーテン(1932)は、遊びの発達段階について社会的行動の観点から分類しており、A 公園における幼児だけでの遊びの段階は、「ひとり遊び」、「傍観」、「平行遊び」というところであるが、小学生と遊ぶことによって「連合遊び」、「協働遊び」の段階へ入っていくことができるようになることが今回の観察から示された。よって、幼児だけで遊ぶばかりではなく小学生も一緒に遊ぶ機会を作ることは、コミュニケーションをとったり、新しい経験をする良い機会となるため、子どものいる家庭における一人っ子の割合が 5 割弱(厚生労働省, 2023)と多いことを考慮すると、幼保小連携の取り組みの一つとして、幼児と小学生と一緒に自由に遊ぶ時間を設けるなどの工夫をすることが大切であると考えられる。

表2 幼児・小学生別遊びの種類

公園の種類	A公園(固定遊具なし)	B公園(固定遊具あり)
幼児の遊びの種類	鬼ごっこ・スキップ鬼ごっこ(小学生のみスキップ)・追いかっこ・地面に絵を描く・物を拾う・ブロック(縁石)歩き・踊り	ターザンロープで遊ぶ・柵で鉄棒・どんぐり拾い・地面に絵を描く・砂遊び・スプリング遊具・健康器具(吊り橋・階段)
遊びの数	7	7
小学生の遊びの種類	鬼ごっこ・スキップ鬼ごっこ・追いかっこ・物を拾う	ターザンロープで遊ぶ・ターザンロープのロープでブランコ・ターザンロープの投げたロープを追いかける・物を拾う・石を使った遊び(土を掘る・投げる・蹴る)・スプリング遊具・健康器具(吊り橋・階段)
遊びの数	4	7

3) 動きの種類

文部科学省(2012)が策定した『幼児期運動指針ガイドブック』には、幼児期に経験する基本的な動きの例が28個紹介され、「体のバランスをとる動き」、「体を移動する動き」、「用具を操作する動き」の3つのカテゴリーに分類されている(表3)。そこで、固定遊具のないA公園と固定遊具のあるB公園のそれぞれにおいて、出現する基本的な動きの種類を数え、カテゴリーごとにまとめた(表4)。その結果、全体の総数はA公園8個、B公園16個となり、B公園のほうが多い結果となった。具体的には、A公園では、「体のバランスをとる動き」の「立つ」、「体を移動する動き」の「歩く」、「走る」、「はねる」、「跳ぶ」、「用具を操作する動き」の「持つ」、「押す」が見られた。B公園では、「体のバランスをとる動き」の「立つ」、「回る」、「渡る」、「ぶら下がる」、「体を移動する動き」の「歩く」、「走る」、「はねる」、「跳ぶ」、「用具などを操作する動き」の「持つ」、「運ぶ」、「投げる」、「捕る」、「蹴る」、「押す」、「掘る」、「引く」といった動きが見られた。なお、B公園での動きは固定遊具での遊び以外のものも含まれる。

固定遊具のないA公園では、鬼ごっこや追いかっこが遊びのメインとなり、「体を移動する動き」はB公園とほぼ同数(A公園5個、B公園4個)見られたが、姿勢変化を伴う運動遊びや用具を操作する運動遊びをすることが難しいため、「体のバランスをとる動き」と「用具を操作する動き」のカテゴリーの動きが少ない結果となった。

固定遊具のあるB公園では、「体のバランスをとる動き」と「用具などを操作する動き」のカテゴリーに含まれる動きの数がA公園より、それぞれ3個、6個多い結果となった。B公園で一番多く見られたのは「用具を操作する動き」であった。ただし、「蹴る」「掘る」は固定遊具での遊びではないため、固定遊具の有無での違いを比べる場合は2個動きが減ることになるが、それでも、「用具を操作する動き」が6個と他のカテゴリーの4個に比べ、多い結果となった。固定遊具があることで、動きに様々な変化をつけやすくなり、結果として固定遊具のない公園より動きが多くなったと考えられる。

表3 幼児期に経験する基本的な動きの例(28コ)

体のバランスをとる動き	立つ, 座る, 寝転ぶ, 起きる, 回る, 転がる, 渡る, ぶら下がる
体を移動する動き	歩く, 走る, はねる, 跳ぶ, 登る, 下りる, 這う, よける, すべる
用具などを操作する動き	持つ, 運ぶ, 投げる, 捕る, 転がす, 蹴る, 積む, こぐ, 掘る, 押す, 引く

(幼児期運動指針ガイドブック(文部科学省, 2012)を基に筆者作成)

表4 公園別動きの種類

	A公園(固定遊具なし)	B公園(固定遊具あり)
体のバランスをとる動き	立つ	立つ, 回る, 渡る, ぶら下がる
体を移動する動き	歩く, 走る, はねる, 跳ぶ, よける	歩く, 走る, はねる, 跳ぶ
用具などを操作する動き	持つ, 押す	持つ, 運ぶ, 投げる, 捕る, 蹴る, 掘る, 押す, 引く
動きの数	8	16

ただし、今回、固定遊具のないA公園においては、ボールや縄跳びなどの用具の持ち込みをしない状態での遊びの実施であったため、A公園とB公園で動きの種類数に大きな違いが出たが、用具の持ち込みを可にすれば、「用具などを操作する動き」を増やすことは可能であると考えられる(例えば、ボールを投げる・捕る・蹴る・運ぶ、縄跳びを引く、など)。また、鬼ごっこも、今回スキップ鬼ごっこを実施したことにより、「体を移動する動き」の「はねる」の動きが一つ増えているが、そのほかにも、例えば、氷鬼のアレンジバージョンでタッチされたらしゃがんで仲間の助けを待つ、などの遊び方に工夫を加えれば、「体のバランスをとる動き」の「座る」という動きが1つ増えることになる。よって、動きの種類を増やすことに主眼を置く場合には、用具の持ち込みや遊びのアレンジバージョンを多く経験していることにより、固定遊具のない公園でも動きの種類を増やすことは可能であると考えられる。よって、園などで様々な運動遊びを経験しておくことが、子どもたちだけで行う自由遊びの幅を広げることに役立つため、保育者側も意識して保育中に様々な運動遊びを実施することが重要である。

4) 子ども同士のコミュニケーションについて

固定遊具なしのA公園での様子を観察すると、遊びを提案したり、一人になっている幼児を遊びに誘ったりするなど、小学生を中心に言葉によるコミュニケーションが多く見られた。遊びを始める流れとしては、一人の子どもがしたい遊び(鬼ごっこ)を提案し、それに対して皆が賛成する、その後、じゃんけんによって鬼を決める、という流れになっていた。しばらくして、遊びがうまくいっていないと感じた一人の子どもが遊びを中断し、その子どもに他の子どもが集まっていき、ルールについて話し合い、内容を変更していた。このように、遊びの中に言葉によるコミュニケーションが存在し、それにより、遊びがより楽しめるものに変化しながら進行していた。また、言葉以外のコミュニケーションも多く見られ、公園内に落ちていた物を見せ合う、ジェスチャーで遊びに誘う、鬼決めジャンケンをする、肩を持つなどのスキンシップがあった。スキンシップが見られた要因として、固定遊具などの障害物がない為、子どもたち自身の距離が近いということが考えられた。

一方、固定遊具のあるB公園の場合、子どもたちは固定遊具の順番を守る、遊びの中で役割分担をする、小学生が幼児の手を引いてあげるといった光景が見られた。具体的には、ターザンロープで遊んでいる際に、列を作り順番を守っており、自分が遊び終えたら、次の子どもにロープを渡すといったことを自然に行っており、会話をしていないにも関わらず、周りの子どもを思いやり、子どもたち同士で暗黙のルールのようなものを作っていた。また、ターザンロープに乗っている人を押す子どもと、ターザンロープに乗って押される子どもというように、子どもたちの中で役割を決め、役割を交代しながら遊ぶ姿も見られた。

二つの公園でのコミュニケーションを比較すると、固定遊具のある公園よりも固定遊具のない公園のほうが子どもたち同士で話し合う時間が長かった。固定遊具がない場合、遊びを開始するまでに何をするか相談したり、幼児と小学生と一緒に遊びをするにあたり、年下の子どもも楽しめるようにするにはどのようにすればよいかルールを考えるため、言葉でのコミュニケーションに時間を費やす必要があった。遊びのきっかけとなる固定遊具がないため、子どもたち自身で話し合い、遊びを提案し、工夫していく姿がA公園では見られた。最初、個々に走ったり、落ち葉を拾ったりなどの遊びをしている子どももいたが、そのうち、皆でまとまって遊ぶためにはどの遊びを行うのが良いのか自然に相談しはじめ、観察を開始してから6分後に皆で鬼ごっこを始めるということになった。なお、遊具のあるB公園で

は観察を開始してすぐ遊具で遊び始めていた。遊具のない A 公園では、遊び開始までの時間が長く、また、途中も年下の子どもが楽しめるようルールを工夫する相談が行われるなどしたため、結果として、遊びに費やされた時間は B 公園に比べ短くなったが、異年齢と一緒に遊ぶ時間は A 公園のほうが長い結果となった。

遊びの種類や動きの種類、運動時間、社会的ルールの学びを考えると、固定遊具のある公園のほうがメリットが多いということになる。しかし、子どもにとって、コミュニケーションをとり、集団で遊ぶという機会は社会性を育む上で重要なことである。幼稚園教育要領(2017)や保育所保育指針(2017)において、幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿が記載されているが、A 公園において、皆と一緒に遊ぶためにどの遊びをするか話し合ったり、幼児も一緒に楽しめるようルールを工夫する取り組みは、10 の姿のうちの「思考力の芽生え」や「言葉による伝え合い」が該当する。幼児が小学生と一緒に過ごすことで、自然と目指す姿を体感することとなり、これらの経験は固定遊具のない公園だからこそ得られるもので、固定遊具がない公園の存在意義も十分あるものと考えられる。

4. まとめ

固定遊具のある公園は固定遊具のない公園に比べ、遊びの種類と動きの種類が多く、運動遊びに費やす時間の長いことが確認された。一方で、固定遊具のない公園では言葉をはじめとしたコミュニケーションに費やす時間が長く、異年齢の子ども同士と一緒に遊ぼうとする工夫が見られ、結果、異年齢と一緒に遊ぶ時間が長かった。つまり、幼児と小学生がただ同じ空間にいるのではなく、一緒に遊ぶことにつながっていく環境が固定遊具のない公園であったということになる。このように、どちらの公園にも異なる利点のあることが今回明らかとなった。よって、どちらか一方の種類のみが存在していればよいのではなく、双方存在することが子どもの健やかな成長にとって重要であるものと考えられる。

謝辞

本調査に協力していただきました幼児、小学生、保護者の方々に心から感謝申し上げます。

付記

本論文は、2024 年度こども教育宝仙大学卒業論文の内容を加筆・修正し、再編成したものです。

<引用文献>

- 1) 国土交通省(2025)都市公園における遊具の安全確保に関する指針(改訂第3版).
<https://www.mlit.go.jp/toshi/park/content/001751662.pdf>
(2025 年 1 月 13 日閲覧)
- 2) 森川みゆき(2011)子どもたちの身近な遊び場を考える—プレイパークの現状—, 八州学園大学紀要, 7, 61—65.
- 3) 一般財団法人日本生涯学習総合研究所, 非認知能力について.
<https://www.shogai-soken.or.jp/non-cognitive-skills/>
(2025 年 1 月 13 日閲覧)
- 4) 小塩真司(2021)非認知能力. 北大路書房.
- 5) Bridges, K.M.B. (1932) Emotional development in early infancy, Child Development, 3, 324—341.
- 6) 厚生労働省(2023)国民生活基礎調査の概況.
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa23/index.html>
(2025 年 1 月 13 日閲覧)
- 7) 文部科学省(2017)幼稚園教育要領, フレーベル館.
- 8) 厚生労働省(2017)保育所保育指針, フレーベル館.
- 9) 文部科学省(2012)幼児期運動指針ガイドブック.
https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/undousisin/1319772.htm
(2025 年 1 月 13 日閲覧)